③総合学習の伝統を生かして～「児童指導コーディネーターの設置」と「総合学習」～（南区・日枝小学校）

執筆者
松永　昌幸　横浜市立日枝小学校長
鈴木　陽一　教務主任
後藤　直樹　児童指導コーディネーター

1 はじめに

児童指導に関わる問題はどこの地域、どこの学校にも存在します。児童指導の問題は「核家族化」「少子化」といった社会現象とも密接に関連しており、近年、問題がより複雑になっています。

小学校では多くの場合、児童指導への対応は学級担任一人の手に委ねられてきました。実はここに問題の一端があります。教育現場には、二十年以上経験を重ねた担任もいれば、この四月に新卒で着任したばかりの担任もいます。児童指導は教科指導と異なり、これと決められたマニュアルが存在するわけではありません。実践経験の積み重ねによる「経験知」が多くを占めています。ここ数年で団塊の世代が定年で退職することにともない、初任者の急増が予想されています。職場の若返りをそのまま経験不足に直結させることのないよう、組織としての体制づくりが急務の課題といえます。

2 児童指導の三段階

児童指導の観点から、学校生活そのものを大きく三つの段階に分けて考えると次のようになります。

❶一次的児童指導（魅力ある学校づくり）

これは日常の学習活動そのものです。創意工夫された授業により、子どもたちが主体的に楽しく学習に取り組める環境を整えます。すべての児童に対する成長促進的な指導支援をすることです。本校の場合は、後に詳しく述べる「総合学習」を核として、体験を重視した問題解決的な学習に取り組んできました。

❷二次的児童指導（予防的な児童指導）

「登校しぶり」「学習意欲の低下」「学級での孤立」などの傾向が見られる児童に対しての指導支援です。子どもが発しているSOSのサイン、抱えている問題をなるべく早い段階で見つけ出すことが重要です。担任という一人の目だけでは思いこみや先入観が入り込む余地があります。また、微妙なサインを見落としてしまう可能性もあります。

そのため、より多くの目で子どもを見る必要があります。例えば「少人数指導」や「交換授業」を通して、いろいろな教師が一人の子どもと関われる場を意図的に作り出す方法があります。中学校の教科担任制とは異なりますが、一つの単元をまるまる隣のクラスの担任が教えることもあります。この取り組みは子どもたちの目には新鮮に映ったようです。人格形成にもプラスの効果が期待できる取り組みです。また、十七年度から、教師志望の学生ボランティアを「ふれあい先生」として配置しています。年が近い若者だけに見せる親しみに満ちた子どもたちの表情が見られます。

これらの取り組みは、一人の子どもについて「複数の教師の糸でつながっている」という状況を作り出すことを目的としています。また、普段から子どもたちと教師の人間関係を広くしておくことで、後に述べるコーディネーターの活動がしやすくなる側面があります。

❸三次的児童指導（対応的な児童指導）

「不登校」など特別な支援が必要な児童に対する指導支援です。支援チームにより、個に応じた指導プランを作成し、担任をサポートする校内体制を整え、保護者の協力を得ながら実践していきます。また、外部機関との連携も平行して進めていきます。

3 児童指導コーディネーターの設置

いかにすれば、組織として児童指導の問題に対応できるのでしょうか。いかにして、担任一人という「点の対応」を「面の対応」にできるのでしょうか。その一つの方法としてコーディネーターの設置

を考えました。低・中・高学年の三ブロックそれぞれにコーディネーターを選任し、情報の集約や課題の検討にあたります。主な活動内容は次のとおりです。

❶情報の集約と分析

児童に関する情報は（図1）のような流れで、コーディネート会議に集約されます。スクールカウンセラーや養護教諭による違った視点からの情報は、大切なポイントとなります。コーディネート会議を月1回のペースで開き、情報の交換や支援チームからの報告が主な議題となります。話し合った内容は職員会議などを通して、全職員への共通理解を図ります。

❷複数による対応

保護者の同意のもと、相談等に対して複数で対応します。学年主任やコーディネーターが同席する形をとっています。（通常の個人面談などは除く）保護者にとっても、「多くの教師が我が子を見守ってくれている」という安心感につながります。

❸相談窓口の拡大とその周知

子どもや保護者の相談に対応するのは、基本的に学級担任です。しかし、一人ひとりの子どもにとって、必ずしも担任が一番話しやすい相手とは限りません。そこで、あらかじめ相談窓口を拡大しておきます。従来のスクールカウンセラー・養護教諭に加え、コーディネーター・学年主任などがそれにあたります。また、相談窓口の存在をあらかじめ子どもや保護者に周知しておくことも大切です。

❹スクールカウンセラー

カウンセラーへの相談は、保護者を含め年間三百件程度あります。その内容は「友人関係」に関するものが多くなっています。「進路」や「家庭内の悩み」を相談に来る子どももいます。

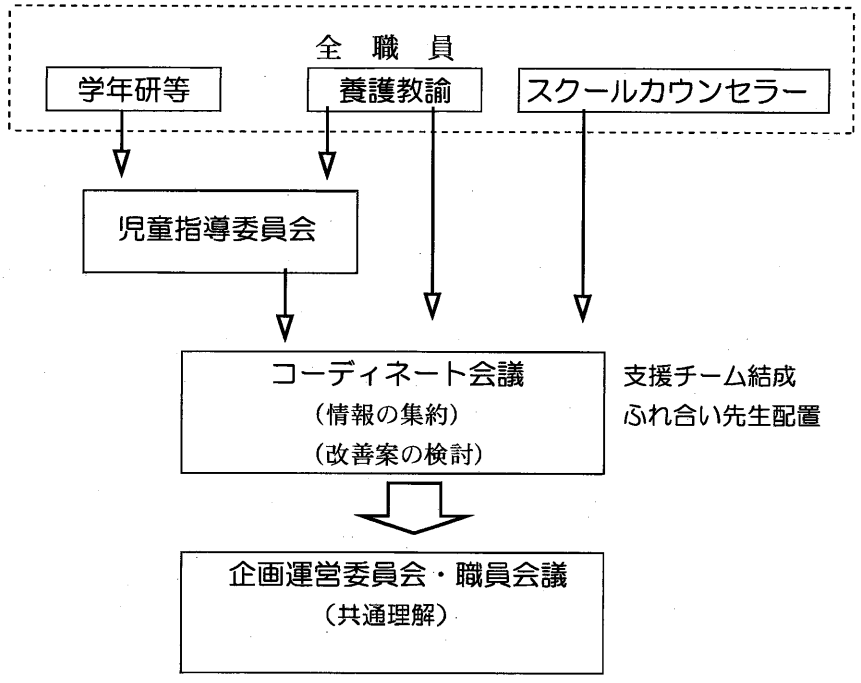
4 支援チームの活動

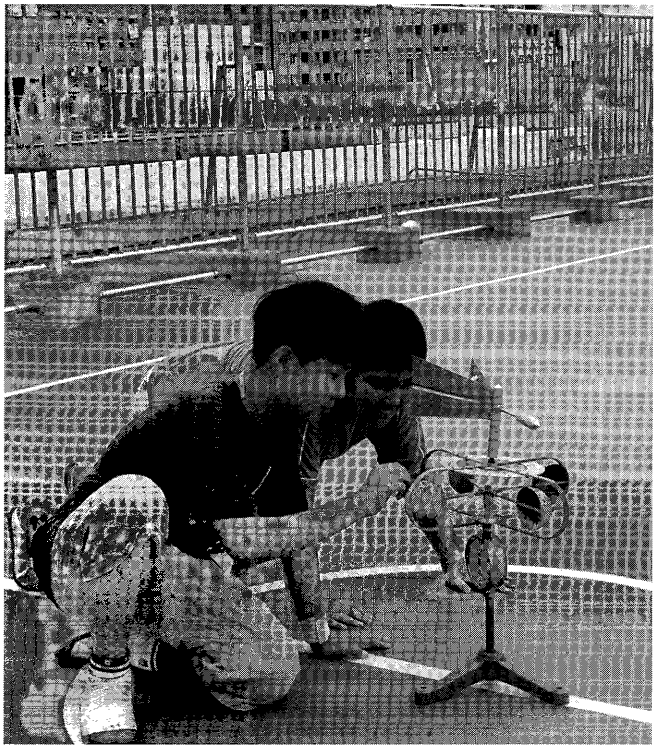
第三次児童指導（対応的な児童指導）に当たる支援チームの活動について述べます。限られた人的配置の中で、特別な支援を十分に行うことは大変に難しいことです。教職員は個別に指導する時間をなんとか生み出す努力をしています。またパニックになったり、教室を飛び出したりした場合の具体的な対応について、保護者とあらかじめ話し合っておくことは重要です。外部の機関等、専門家の意見も参考にしながら、指導に生かしています。何より重要なことは家庭との連携を大切にしながら児童指導を進めていくことです。

一人の子どもの将来を見据え、「保護者」「担任」「コーディネーター」「関係職員」が親身に解決に向けた方法を話し合う中で、相互の信頼関係も生まれてきます。話し合いを重ねる中で、保護者が落ち着きを取り戻し、子どもの問題行動がおさまったケースもあります。

ここまで、組織的な児童指導について述べてきましたが、児童指導にとって第一に重要なことは「子どもたちにとって学校が楽しく魅力的な場所であること」なのです。

図1　早期発見のための情報収集体制





5 魅力ある学校生活づくり ～すべての児童に対する成長促進的な指導支援～

児童指導の目指すところは、学校目標「生き生き日枝っ子」と一致します。子どもたちの「生きる力」を育んでいくことにあります。その根幹である「魅力ある学校生活づくり」のために「教科との関連を図った総合学習」を核とした取り組みを行ってきました。

日枝小学校では、二十年以上も前から「総合学習」に取り組み、学級経営の核として位置付けてきました。「総合学習」は、学級ごとに子どもと教師が、追究する内容を決め、学習計画を練って展開していきます。

教師は、子どもたち一人ひとりの「思いや願い」「発想」を大切にしながら、学級全体の課題や目標を子どもたちと決めていきます。そして、その追究過程において「教科の内容とどう絡めていけるか」（教科との総合的、合科的、関連的な扱い）「一年間その課題や目標で学習が展開できるか」（年間カリキュラムの作成）などを吟味し内容や課題（問題解決的・体験的学習の展開）の整理をしていきます。また、子どもたちに「学習の見通し」をどのようにもたせていくかについても考えていきます。教師自身がカリキュラムの開発や授業改善に取り組んでいるのです。

子どもたちは、「総合学習」を楽しみにしています。自分たちの思いや願いを実現でき、様々な創意工夫や発想を生かしながら「自分たちの手で学習が進むこと」に魅力を感じているのです。また、学級ごとに活動内容が異なるため、それぞれの子がその道のエキスパートになることができます。「総合学習」を通して、学級の活動や学級に「誇りや自信」をもつことができるのです。「総合学習」に取り組むことで、子ども一人ひとりが、学級での存在感・有用感をもつことができます。このことが、子どもたちの「学校に行きたい」という思いにつながります。この教育活動が本校の児童指導のベースになっています。

6 実践例

「あした天気になあれ　こちら日枝気象協会」

これは、ある学級が、五・六年と二年間取り組んできた実践例です。

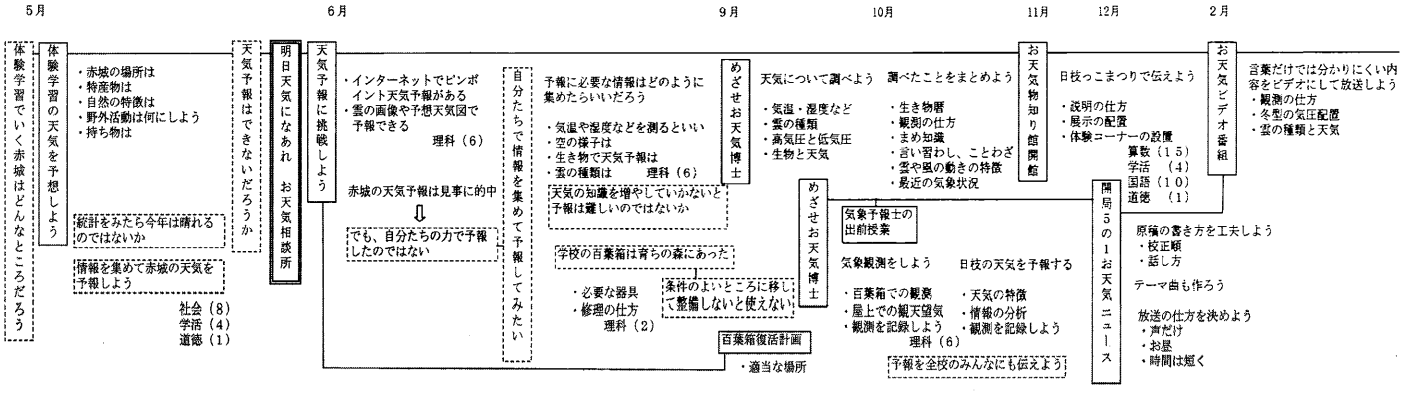
❶活動のきっかけ

理科の学習「天気の変化」と赤城の宿泊体験学習が活動のきっかけです。子どもたちは、体験学習の活動の計画をたてながら、天候によって活動や持ち物が左右されることに気付きました。そして、赤城の気象について調べ、体験学習を行う当日の天気が分かると便利だと考えました。そこで、理科の「天気の変化」の学習と絡めて、天気について調べることにしました。さらに発展させ、天気予報に挑戦をしたのです。「山の天気が変わりやすいわけ」「群馬県は雷が多い」「雲の動きには規則性がありそうだ」などについてわかり、体験学習の天気の予想を自分たちなりに行うことができました。

この活動から「もっと天気のことを知りたい」「天気予報を続けてやってみたい」という思いが高まり、学級の活動「あした天気になあれ　こちら日枝気象台」となりました。

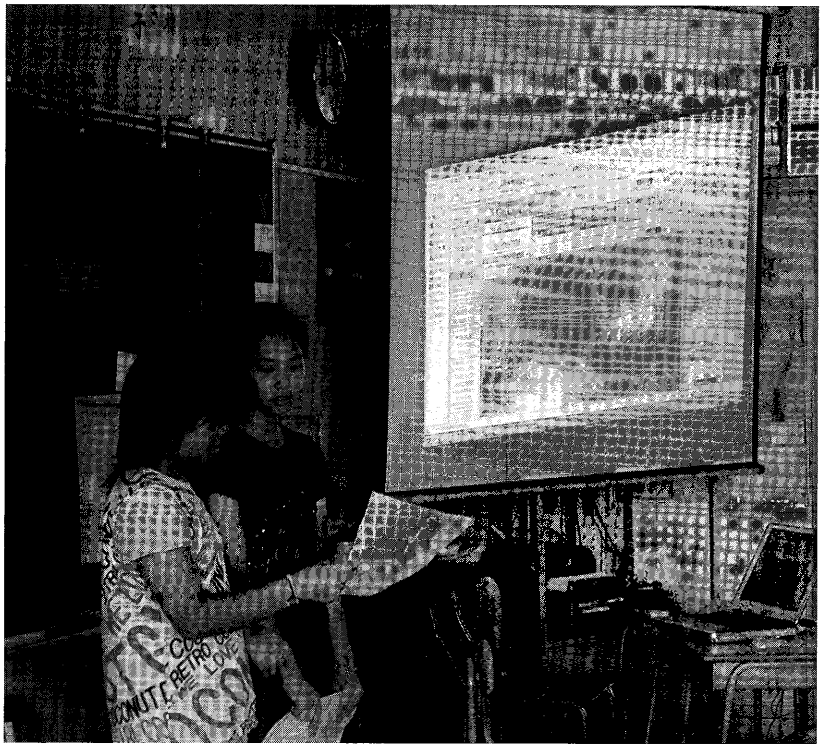
❷活動の広がり

気象台の見学や気象予報士との交流も行い、内容が徐々に深まっていきました。学習



が進むと「天気について調べたことを全校のみんなに知らせよう」「天気の予想を全校のみんなに知らせる放送を行おう」と活動に広がりが出てくるのです。天気について調べたことは、「日枝っ子まつり」で発表を行いました。雲ができる仕組みや温暖化現象についての実験を行ったり、雷の仕組みや雲の種類と天気の関係などについて解説したりしました。百葉箱や屋上での気象観測結果とインターネットでみる雲画像（一日の雲の動き）から、自分たちで天気予報を行い、昼に「お天気ニュース」として放送しました。

「お天気ニュース」では、天気に関する言い伝えや季節の移り変わりに関する自然現象、最近のニュース・学校での出来事なども放送の内容に取り入れ、さらなる深まりを見せていきました。またオープニングやエンディングテーマ曲を作るという活動も行いました。テーマ曲が流れると低学年のクラスでは、大合唱が毎日起こるくらい人気でした。この「お天気ニュース」は、この学年の卒業式前日まで、一年四ヶ月の間、毎日続きました。



❸活動の成果

この活動では天気という理科的な内容が多くを占めましたが、それだけにはとどまりません。「お天気ニュース」での原稿書きでは、相手に分かりやすい文にするために、校正を行いました。また、放送を聞き取りやすく、楽しい読み方をするように心がけることで、「話すこと」に自信がついた子どももいました。人前で話をしたり、手を挙げたりすることが苦手だった子どもが、学級会で進行役をしたり、話をまとめたりできるようになりました。この子は「放送を通じて話すことに自信がでてきた」と話してくれました。放送のテーマ曲を作ったことで自信がでて、曲作りにイメージをもって取り組めるようになった子どももいました。

もちろん理科の内容についても多く身に付いています。百葉箱での気象観測の経験は子どもたちの大きな財産になりました。何より、学級全体が、これほど長い間、毎日観測と原稿書きと放送を続けられたことに自信と誇りがもてたと思います。それは、放送の最後の日に全校へのメッセージとして「みなさん、これからも天気に興味をもってください。そして、このお天気ニュースがあったことを忘れないでください。」という言葉にこめられています。自分たちが行ってきた活動という自負がそこにはありました。

うまくいかなかったこと、意見が合わなかったこと、難しくて分からなかったこともありました。しかし、自分たちで決めた活動であり、自分たちで創意工夫して行ってきたからこそ自慢にでき、誇りに思えるのでしょう。「総合学習」を通じて、知識を得るだけでなく、協力の大切さ、表現力、思考力、情報収集力など様々な力が総合的に培われているのです。

日枝小学校では、このような活動が全学級で展開されています。ある年の高学年の学級の題材は、「もやし」「竹」「大岡川」「凧」「天気」「米」「トイレ」でした。実に多岐にわたっています。子どもたちは「今年の活動は何を行っていくのだろう?」とワクワクした気持ちでいっぱいなのです。

7 地域との連携を図る ～日枝っ子まつり～

日枝っ子まつりは「総合学習」で学んできたことを、全校、家族、地域のみなさんに報告、発表する場です。調べたことの展示説明、実験や観察、料理と試食、劇や歌の披露など、さまざまな方法で報告を行います。また、活動でお世話になった方や地域の方を招待し、日頃のご協力に対して感謝の気持ちを伝えます。家族や地域の方に参観していただき、活動や学校の教育方針について理解していただくことが大きな目的でもあります。

地域のみなさんや保護者も学校や学校の総合活動を誇りに思ってくださっています。温かい目で子どもたちの活動や学習・生活を応援していただけます。そのおかげで子どもも教師も安心して地域に出かけ活動することができるのです。